

## 第4章

### ニューヨーク活動報告

#### ニューヨークでの体験

1年の滞在期間を通して、ニューヨークを本拠地とするオーケストラ、オペラ団体から海外の演奏家によるものまで、多種多様なコンサートやライブに可能な限り足を運び、そのプログラムや演奏家のコメントなどに注目していた。ここでは、その中でも特に強く印象に残っている演奏会について報告する。

まず、ニューヨークではどのような演奏会においても、必ず多人種の演奏家が自分のルーツを示す名前と共に舞台上立つ。しかし、そこで彼らは自分の人種を主張しなければ、観客も演奏家の人種などにほとんど関心を持たない。表現者にとって、自分が何者であるかということよりも、自分にしか表現できないものを生み出せるかどうかの問題なのである。そして観客はそこで表現されたものが魅力的であるかどうかに関心がない。しかしながら、この関係性にはある傾向があるように感じられた。自分がどのようなルーツをもつ人間だったとしても、演奏の表現には自分のエスニシティが自然と反映されるはずである、と語る演奏家は「クラシック」音楽、「ジャズ」音楽や「ポピュラー」音楽など、確立した音楽フォームに携わっていることが多い。一方、完全に何でもありと受け手が手を広げて構えるようなジャンルで表現活動を行っているアーティストは自分のエスニシティを前面に押し出す。これは、まだ私感の域を越えない意見だが、湯浅譲二氏が「未聴」という言葉で表現する、皆が体験したことのない表現を生み出そうとする時、人間は自分のエスニシティと向き合うという行為を迫られるのではないだろうか。

いま、「現代音楽」というジャンルを定義づけるのは大変困難である。特に、ニューヨークのようにビジネス色の強い都市においては、聴衆の賛同が音楽の必須条件とされ、その枠組みも大きく捉えられているように感じられる。しかし、音楽ホールに足を運ぶ人間の絶対数が多い大都市においては、観客の趣向も広域にわたり、必然的に「現代音楽」を好んで聴く人数も

それなりの数になるのである。そのため、主要な音楽団体はそれぞれが現代音楽関連の事業を行っている。ニューヨーク・フィルハーモニックの「CONTACT!」、カーネギーホール「Making Music」をはじめ、アメリカン・コンポーザーズ・オーケストラは常に同時代の作曲家の作品を取り上げ、ニューヨークにある大学のほとんどが音楽学部主催の企画で現代作曲家の作品を取り上げている。音楽学部にコンポーザー・イン・レジデンスのシステムが整えられていることもこれに影響を与えているのだろう。

私はそれらの企画に参加する観客を観察し、1つ感じたことがある。それは、ニューヨーカーは心のどこかで「ニューヨークは新しいことが生まれる」場所であることを信じ、そこに身を置くことにプライドを持っていることだ。他の都市に生活する人に比べて圧倒的に「他で見たこと・聴いたことがないもの」「思いもよらない発想」との出会いを切望し、そこから得られる刺激を求めているように思うのだ。その瞬間に居合わせるのがクールだと信じていると言ったら言い過ぎだろうか。

市民のこのような嗜好があるからこそ、ニューヨークにジャズが根付いているのかもしれない。世界中のジャズ・プレイヤーがニューヨークを目指すのは、そこが一流のアーティストを数多く輩出した街であり、耳の肥えた観客が多い所為だろう。しかし同時に、目の前で起きる化学反応にスリル感や興奮を覚え、病み付きになっていく市民が多いのも確かなのではないだろうか。現に私もジャズに関しては全くの素人なのだが、同じアーティストでも録音を聴いているよりは、ライブで何が起るか、その興奮した空気を共有できるのが数倍おもしろいと感じるのである。

#### THE STONE にて

ニューヨークのローワー・イーストに、そのような刺激を求めて集まる観客にただその興奮だけを提供するライブハウスがある。ゾン・ジョーンズというサク

ソフォン・プレイヤーがディレクターを務めるそこは、「THE STONE」と名付けられ、即興パフォーマンスが連日行われている。看板も掛かっておらず、歩道脇の壁を隔てたらずそこに客席があるといった具合で、本当に何の変哲も無いブラック・ボックスなのである。

私は2012年4月29日にここで行われた坂本龍一と大友良英のパフォーマンスを聴きに行った。約1週間のプログラミングを坂本龍一が担当したうちの1つで、その日の前後も坂本氏が共に即興演奏に興じてみたい演奏家をセレクトしてパフォーマンスが行われていた。スタジオはただの箱であり、ロビーもなければ待ち合わせをするスペースもない。観客は演奏開始数分前まで、道路で並んで待たされ、開場と同時に建物に入る。中は、ストイックに演奏するスペースと、それを聴く人の座るスペースのみという空間が追求されている。

このプログラムを見に行こうと思ったきっかけは、2011年11月19日にジャパン・ソサエティで行われた大友良英氏とクリスチャン・メークレー氏による「ターンテーブル・デュオ・コンサート」のチケットが売り切れで買えなかったからである。このようにいうと突拍子もないが、仕方がなくその代わりにチケットを買って参加したプレコンサート・アーティスト・トークがとても興味深かったのだ。そして、ここで紹介された「音響」と呼ばれるジャンルを実際に体感してみたかったのである。

プレトークで司会を務めていたデイヴィッド・ノヴァック氏から、その後、出版された本の原稿や論文のコピーを頂き、勉強してみた。ノヴァック氏の「音、無音、即興のグローバルな価値」によると、このジャンルは1990年代末、日本で始まったという。(2010: 376) これだけを読んでいると、一体何のことなのか音楽のイメージが全く掴めなかったのだが、このパフォーマンスを実際に聴いて、これがジャズという脈絡の先に存在するということがほんの少し理解できた。何をもち「ジャズ」と定義づけられるのか、私には言及できるだけの知識がない。しかし、他の音楽にないジャズの醍醐味と言えば、予測不可能な即興の要素である。そして、私が体感したパフォーマンスが「音響」と知られるジャンルなのだとしたら、「音響」は、ただひたすら静寂で、透明感があり、どこかノスタルジーを感じさせるような地味な色合いに、奥行きを感じる音響空間を創造する即興演奏であった。この日のパフォーマンスは、坂本龍一氏がピアノを、大友良英

氏がギターを使い、それぞれが様々な小道具を使って未知の空間を作り出す。とにかく優しい世界を描く2人は、客席から見ても楽しそうであった。しかし、スペシャル・ゲストとして登場したアート・リンゼイが加わった途端、彼から放たれる硬質な石が波紋を起こし、2人の描いた世界の色はリンゼイ氏の色と混ざり合った。そして、その後中和していく様子を音で見せられているかのような空間がボックス内には存在していた。

初めての体験の感想以上の何ものでもないが、このジャンルのファンは大変多いようである。先に書いたパフォーマンスも完売だったが、このパフォーマンスも1時間近く並んで、やっと立ち見で入れたものであった。彼らはこのパフォーマンスに何を感じて、また何を求めて集まるのだろうか。なぜなら、自分でやってみての方が楽しめるジャンルなのではないか、と感じたからだ。次の機会には、ぜひ観客に聞いてみたい。日本人であることを思い起こす音楽ですか、と。

## ニューヨーク・フィルハーモニック CONTACT!

次に、エスニシティに関して考えるチャンスを与えられた演奏会は、ニューヨーク・フィルハーモニックの音楽監督を務めるアラン・ギルバート氏が2009年から始めた「CONTACT!」と題されたニュー・ミュージック・シリーズでのものである。ちょうどこのステージ上で、アラン・ギルバート氏のアメリカの作曲家の作品演奏、また現代音楽への貢献に対して2011年Diston指揮者賞が贈呈された。Zachary Woolfe氏は、2012年1月6日の『New York Times』の紙面で、彼がCONTACT!シリーズで取り上げた作品の半数のみがここ10年以内に作曲された作品であること、また今シーズンにおいては1名を除いた作曲家が全て50歳以上であることなどを例に挙げ、アラン・ギルバート氏およびニューヨーク・フィルハーモニックの試みはまだ不十分であることを指摘している。その姿勢の比較として、ロサンジェルス・フィルハーモニック率いるグスターボ・ドゥダメル氏の取り組みを例にあげている。おそらくWoolfe氏と同様の意見をもっている人も相当数存在すると考えられる。ニューヨークに暮らす人が世界に誇るニューヨーク・フィルハーモニックが同時代の音楽と関わっていくことが、ニューヨークの街そして文化に真に寄与するオーケストラの使命

であるということは、やはりニュー Yorker の趣向によるところが大きいのだと思うのだ。とはいえ、このコンサートはニューヨークにて新しい作品を聴くことのできる貴重な機会であるため、私は2度このシリーズに足を運んだ。そのような企画の中で委嘱作品が初演された Alexander Lunsqui 氏のコメントが印象的であった。

当時 42 歳であった Lunsqui 氏は、Woolfe 氏が今シーズン中唯一 50 歳以下であったと指摘した作曲家である。プログラムに記載されている彼のプロフィールには、彼が出身国であるブラジルで音楽教育を受けた後、渡米し、アメリカ国内の大学およびパリにある IRCAM において、その才能を開花していったことが紹介されている。(Keller 2011: 5) この日このコンサートで初演された作品「Fibers, Yarn, and Wire」は、審査員全員一致で選出されたという作品であった。審査にあたったマグヌス・リンドベレイも多量のスコアの中にあつて、Lunsqui 氏の作品は「彼が何をしようかとてもよく理解していることが作品に表れていた」と賞賛している。(Keller 2011: 5)

初演された作品は、先人のスタイルに重ならない初めて体験する音空間が作り出されていて、そのずば抜けたリズム感や枠にはまりきらないダイナミクスはとても刺激的で魅了されるものであった。この作品が演奏された後、作曲家自身が舞台上に上がり、作品についての短いトークがあった。まず聞き手は彼に対し「自分のエスニシティを意識して作品を書いているのか」という質問をぶつけた。これは、プログラムに「彼の音楽スタイルは多岐に渡り、その作品はブラジルの Folk Music にインスパイアされている、とも記されている。」(Keller, 2011: 5) と書かれていること、また直前に初演された作品があまりに独創的であったことなどから、聞かずにはいられなかったのだろうと感じられた。

しかしながら、彼ははっきりと「全く意識していない」と答えたのである。確かにこの作品に関する作曲家自身のコメントからは全くそのようなコンセプトは見られないし、彼があの場合にあってブラジル人作曲家であることをアピールする必要性は全く感じられなかった。これは、福中琴子氏が著書『音楽、未知への旅』の中で「アメリカのジャーナリズムが、「西洋の目」というフィルターを通して、作品を聴くことを志向してきた」(2011: 224) と日本人作曲家に向けられた視線を指摘した時と同様のことが起きているのではない

だろうか、と感じた瞬間であった。これは、アメリカに対して、南米や日本が西洋クラシック音楽の分野において後進であったために起きている現象なのだろうか。彼がこの質問に対して返した、苦みを含めた表情が印象的であった。

## Flutes of Hope

ニューヨーク滞在中、邦楽器の演奏会を聴くチャンスも数回あった。このコンサートは聖ジョン大聖堂で開催されていた「ヴォイシス・フロム・ジャパン」<sup>1)</sup>の展覧会に合わせて開かれた邦楽器の演奏会である。アメリカ在住(短期滞在を含む)の4名の演奏家が、琴、尺八、横笛、三味線、和太鼓を演奏した。出演者の1人である尺八奏者の小瀨明人氏は、アジア・カルチュラル・カウンシルからのフェローシップを獲得して、半年間ニューヨークに滞在していた。渡航時期は異なったものの、研究テーマに類似性があったため、機会がある毎にディスカッションを重ねた。

プログラムは、小瀨氏とニューヨーク在住の尺八奏者のラルフ・サミュエルソン氏の演奏する「鹿の遠音」で始まった。大聖堂の巨大な空間の中、客席の外側に大きな円を描きながら奏者が移動するという演出がされ、2本の尺八の音は、観客の後方より聴こえ始め、左右両サイドを前方へ移動する。その間も観客の頭上で尺八の音は行き交うのである。

2人の演奏だけでも存分に楽しめたと思うのだが、大聖堂の反響が観客を大自然の奥地へと誘った。2本の尺八の音が交わるタイミングは、到底単純な音価で処理できるようなものではなく、音程も簡単に採譜できるようなものではない。楽音としてきれいにおさまりきらないところこそが邦楽器の魅力なのだろう。そして雑音をも音として捉える日本人の感性があつて、この自然描写が実現したのだろうと思いを馳せる。

次に演奏されたのは、宮城道雄の「春の海」。日本国内では「古典的な日本」の代名詞であるかのように様々な場面で聴かれる曲である。しかし、この演奏会において、私はこの曲ですっかり現実の世界まで連れ戻されてしまったように感じた。宮城道雄が邦楽器に新しい息吹をもたらした偉業は計り知れないが、この作品を演奏する尺八の音は五線上に並ぶドレミにしか聴こえず、尺八の魅力が完全にそぎ落とされてしまっていた。それと同時に琴もピアノのように聴こえてし



まうのである。

次に演奏された横笛による即興は、また興味深いものであった。もともとフルートとサクソフォンのジャズ演奏家である渡辺薫氏は、本格的な邦楽器のパフォーマンス経験を経て、彼自身のイディオムを作り出しているようであった。即興であるため、指の癖や耳に残る音の記憶などが影響する部分もあるように感じられたが、太鼓を立体的に使用して「時空」を意識させるような創意は、横笛音楽を空間の中で捉えている証拠であり、渡辺氏だからこそのパフォーマンスであったように思う。

「春の海」に続いて、また琴の表現性について考えさせられた演奏が次の「松風」である。西洋クラシック音楽の楽器にない邦楽器のおもしろさは、他の民族音楽と同様に、楽音のフィルターに引っかからない音にあるのだと思う。そう考えていくと、お琴のように事前に調弦が必要な楽器はどのようにして邦楽器特有の歪み（ひずみ）をつくりだしてきたのでしょうか。これは私の勝手な想像だが、邦楽器は管楽器を除いて、基本は歌がついており、自分の声と楽器音でユニゾン奏することで音の歪みが作り出されていたのではないだろうか。そうだとしたら、琴のような楽器は歌と切り離されてしまったために、私が邦楽やその他の民族音楽の魅力だと感じている不安定さが削がれてしまったのかもしれない。しかし、その代償として獲得した安定性のおかげで、独奏曲などの表現の幅は格段に広がったはずである。

これほど充実し、また考えさせられる演奏会は他になかったのかもしれない。それを大聖堂の中で体験しているのだから、やはりニューヨークは凄い場所である。今後も邦楽器奏者の動向に注目していきたいと思う。

## 作曲家 Lei Liang

最後にアメリカ滞在中、SNS上で知り合った作曲家を紹介する。中国生まれの作曲家で、現在カリフォルニア大学サンディエゴ校の准教授をつとめる Lei Liang 氏である。Q2 というインターネット・ラジオ局で、彼のインタビューを聞き、作品も数点聴くことができたため、アメリカ滞在期間中にお会いすることはできなかったが、勝手な親近感を抱いている。彼の作品が上演されたニューヨークのコンサートを逃してしまったのが残念だったのだが、彼の作品もまた彼独自のイディオムによって書かれており、大変興味深い。

ラジオで話す彼はきれいな英語を話し、とても丁寧な受け答えに彼の人格を見るようであった。そのインタビューの中で、彼は自分のこれまでの経緯などを話していたのだが、注目したのは彼の育った環境についてであった。彼の母親はアメリカ音楽、父親は中国音楽（近現代）を専門とする音楽学者だという。やはり、彼も西洋クラシック音楽と伝統音楽を偏見なく捉えられる環境で音感を育ててきたのか、と感じたのである。

17歳でアメリカに渡り、アメリカの高等教育機関において、その創造性を理知的かつのびのびと開花させてきたのだろう。ぜひ、これからも作品を聴いていきたい作曲家である。ここではごく簡単な紹介しかできないが、彼は今世界で注目を浴びる作曲家の1人なのである。そのような作曲家と一瞬にして繋がってしまうネットワーク。人の思考や思想は、その人がどこにいるかを全く関知せず共有されていくということを実感した出来事でもあった。帰国後も世界の研究者たちと意欲的に交流を続けていきたいと思う。そして、彼が証明しているように、マルチ・カルチュラルな教育がもたらす効果を信じ、偏見なくあらゆる音楽と向かい合っていける教員を輩出していけるよう、この経験を教育に生かしていきたいと思う。

## 和太鼓団体への取材

2012年2月に派遣先を訪問された神谷浩夫教授とともに、ニューヨークで活動する和太鼓団体の取材を行った。当初、本報告書にアメリカ東海岸における和太鼓団体の活動についてまとめる予定であった。しかし、その後の追跡調査が十分に行えなかったため、報告書としてまとめるには至らなかった。今後の課題の1つとして、今回の取材結果をもとに、アメリカ東海岸の和太鼓パフォーマンスについて、国際文化資源学研究センターのコラム等で紹介していきたいと思う。ここに取材にご協力頂いた団体について報告し、取材への協力に感謝の気持ちを示したい。

### ① SOH Daiko (僧太鼓)

1979年に東海岸初の和太鼓グループとして、浄土真宗の寺 (New York Buddhist Church) で設立される。その経緯から、仏教に関連する行事・活動への参加が多かったが、多くのマスターに指導を受け、パフォーマンス団体としての質を向上させている。基本的にメンバーで意見を出し合って作品を仕上げる。30年以上

の歴史があり、ニューヨークで活動する太鼓パフォーマーまた太鼓団体は、皆この団体と関連があると言っても過言ではない。それだけ、この団体の歴史は、そのまま東海岸での和太鼓の普及を物語るものである。

② New York Suwa Taiko Association 倉島ひろ氏

1979年に渡米後、アメリカ国内で諏訪太鼓と出会い、パフォーマンスの腕を磨いて専門家になった方である。現在、倉島氏は多くの団体、学校において、諏訪太鼓の基礎を教えており、自身は Taiko Masala というパフォーマンス団体をもって活動する。取材では、指導を通して、海外で生まれ育つ我が子に日本の文化に触れるチャンスを提供したいと願う親御さんの姿を見るとの興味深い話も聞かせてくださった。倉島氏は和太鼓を取り巻く人々の変遷を1番間近に見てきている人である。

③ Kaoru Watanabe Taiko Center 渡辺薫氏

先ほど紹介した Flutes of Hope にも出演していた横笛の奏者である。日本人音楽家の両親をもつ渡辺氏はアメリカ国内で生まれ育ち、笛や太鼓は、日本に渡って修行したという。鼓童での活動も彼の日本を学ぶきっかけの1つであったようだ。もともとジャズの演奏家である渡辺氏の和太鼓への視点は常に冷静であり、大学で講義なども行う。広い枠組みの中で、一音楽家として和楽器を捉える活動は、これから注目すべき1つの道であると感じさせられた。

④ COBU from New York 鼓舞組

現在もオフブロードウェイ「STOMP!」の舞台に立つ宮本やこ氏が立ち上げたパフォーマンス団体である。渡米目的はタップの修行だったが、ある出来事をきっかけに経験のあった和太鼓をつかって作品を作るようになる。最初の作品で振付賞を受賞するという宮本氏のカリスマ性も、この団体の重要なファクターである。現在は、劇場のレジデンスとして活動拠点を確保し、アメリカ全土でパフォーマンス活動を行う女性チームである。

註

1) 大震災後の日本人の姿を世界に伝える展覧会 <http://www.voices-from-japan.org/ja/index.html>

参考文献

- 岩村忍『文明の十字路口=中央アジアの歴史』講談社、2007
- 鳥養潮「作曲家ノート」日本芸術文化振興会、国立劇場調査養成部、調査資料課監修・編集『現代の日本音楽 16—阿吽の音 存亡の秋』（国立劇場委嘱作品シリーズ）春秋社、出版年、3-4頁
- 岡田暁生『レクチャー第一次世界大戦を考える「クラシック音楽」はいつ終わったのか？—音楽史における第一次世界大戦の前後』人文書院、2010
- 奥忍「独立国家共同体 CIS 諸国」日本音楽教育学会編『日本音楽教育辞典』音楽之友社、2004、817-818
- 加藤巖「ウズベキスタンの物価・所得水準と人間開発指数から考える生活環境」和光大学総合文化研究所年報『東西南北』2007
- 加藤周一『ウズベック・クロアチア・ケララ紀行—社会主義の三つの顔』岩波書店、1959
- クリストファー・スモール『ミュージッキング 音楽は<行為>である』野澤豊一・西島千尋訳、水声社、2011
- グリーン・ルーシー「音楽教育、文化資本、社会集団のアイデンティティ—音楽教育は管理のツールか？」『音楽のカルチュラル・スタディーズ』若尾裕監修、若尾裕ほか訳、アルテスパブリッシング、2011、303-313
- 小泉文夫『日本の音 世界のなかの日本音楽』平凡社、1994
- 『音楽の根源にあるもの』平凡社、1994
- 『インドからヨーロッパへ—世界の民族音楽探訪』実業之日本社、1976
- 小林康夫編『現代音楽のポリティックス』書肆風の薔薇、1991
- 小林康夫『21世紀における芸術の役割』未来社、2006
- ザックス・クルト著『音楽の源泉 民族音楽学的考察』ヤープ・クンスト編、福田昌作訳、音楽之友社、1970
- 須田将『スターリン期 ウズベキスタンのジェンダー女性の覆いと差異化の政治』風響社、2011
- 「ウズベキスタン民主化の経緯」NIHU プログラム・イスラーム地域研究東京大学拠点『中東・イスラーム諸国の民主化』（2011.3.1 最終更新）([http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~dbmedm06/me\\_d13n/database/uzbekistan/democratization.html](http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~dbmedm06/me_d13n/database/uzbekistan/democratization.html))
- スロウビン・マーク「民族音楽学における「ディアスポラ」の運命—流れ者の音楽のもち方」『音楽のカルチュラル・スタディーズ』若尾裕監修、若尾裕ほか訳、アルテスパブリッシング、2011、326-341
- 関口義人『オリエンタル・ジプシー—音・踊り・ざわめき』青土社、2008
- 徳丸吉彦「音楽における「記されたもの」と「口で伝えられるもの」—日本、川田順造、徳丸吉彦編『口頭伝承の比較研究 1』弘文堂、1984、376-395

- ディベン・ニコラ「音楽の素材、知覚、聴取—音の認知は文化によって異なる」『音楽のカルチュラル・スタディーズ』若尾裕監修、若尾裕ほか訳、アルテスパブリッシング、2011、219-231
- 西尾哲夫、堀内正樹、水野信男編『アラブの音文化—グローバル・コミュニケーションへのいざない』スタイルノート、2010
- 西島千尋『クラシック音楽は、なぜ<鑑賞>されるのか—近代日本と西洋芸術の受容』新曜社、2010
- ノヴァック・デイヴィッド「音、無音、即興のグローバルな価値」『ニュー・ジャズ・スタディーズ—ジャズ研究の新たな領域へ』宮脇俊文、細川周平、マイク・モラスキー編著、源中由記翻訳協力、アルテスパブリッシング、2010
- 野村良雄『精神史としての音楽史—ヨーロッパ文化における音楽』音楽之友社、1956
- 野村良雄『宗教音楽の歩み』音楽之友社、1963
- ピゲ・クロード・J著『音楽の発見』佐藤浩訳、音楽之友社 1956
- 福島青史(2009)「多言語使用者の言語選択とアイデンティティ—多言語状況の「複言語主義」的記述から」『ヨーロッパ日本語教育』13.
- 福中琴子『音楽、未知への旅』洪水企画、2011
- 藤枝守『増補 響きの考古学 音律の世界史からの冒険』平凡社、2007
- 別宮貞雄『音楽の不思議』音楽之友社、1971
- 堀江則雄『ユーラシア胎動—ロシア・中国・中央アジア』岩波書店、2010
- 間宮芳生、オッリ・コルテクングス『木々のうた—唱うエコロジーの試み』農山漁村文化協会、1997
- 間宮芳生『現代音楽の冒険』岩波新書、1990
- マリー・エティエンヌ・ジャン Jean Etienne Marie『Musique Vivante 生きている音楽』別宮貞雄訳、音楽之友社、1961
- 三木稔『日本楽器法』音楽之友社、1998
- 水野信男『中東・北アメリカの音を聴く—民族音楽学者のフィールドノート』スタイルノート、2008
- 南曜子「ロシア・独立国家共同体とバルト三国」日本音楽教育学会編『日本音楽教育辞典』音楽之友社、2004、816-817
- 茂手木潔子「国立劇場における伝統の創造の経緯と背景」日本芸術文化振興会、国立劇場調査養成部、調査資料課監修・編集『現代の日本音楽 16—阿吽の音 存亡の秋』(国立劇場委嘱作品シリーズ)春秋社、出版年、39-42 頁
- 矢嶋和江『シルクロードの中継点—ウズベキスタン滞在記』早稲田出版、2009
- 湯浅譲二・西村朗『未聴の宇宙、作曲の冒険』春秋社、2008
- ライヒテントリット・H著『音楽の歴史と思想』服部幸三訳、音楽之友社、1959
- ラッハマン・ロベルト著『東洋の音楽 比較音楽的研究』岸辺成雄訳、音楽之友社、1960
- 輪島裕介『創られた「日本の心」神話—「演歌」をめぐる戦後大衆音楽史』光文社、2010
- Atanassov, Vergilij. “Daire,” *The GROVE Dictionary of Musical Instruments*, Stanley Sadie (three volume; New York: Macmillan Press Limited, 1984) 1, 536
- Baily, John. “Ghichak,” *The GROVE Dictionary of Musical Instruments*, Stanley Sadie (three volume; New York: Macmillan Press Limited, 1984) 2, 43
- \_\_\_\_\_. “Rabab4(iii),” *The GROVE Dictionary of Musical Instruments*, Stanley Sadie (three volume; New York: Macmillan Press Limited, 1984) 3, 181
- Bender, Shawn. *TAIKO BOOM JAPANESE DRUMMING IN PLACE AND MOTION*. University California Press. 2012
- Chasteen, C. John. “A National Rhythm: Social Dance and Elite Identity in Nineteenth-Century Havana,” *Music Popular Culture Identities*, [ed. by Richard Young][Critical Studies Vol.19 ed. by Myriam Diaz-Diocaretz] (Rodopi, 2002) 55-73
- Cooke, Peter. Dick, Alastair. And others “Violin(IV),” *The GROVE Dictionary of Musical Instruments*, Stanley Sadie (three volume; New York: Macmillan Press Limited, 1984) 3, 802-803
- Djumaev, Alexander. “Musical Heritage and National Identity in Uzbekistan.” *Ethnomusicology Forum* Vol.14, No.2 (Routledge. 2005) 165-184
- \_\_\_\_\_. “Sacred Music and Chant in Islamic Central Asia,” *Garland Encyclopedia of World Music*, Danielson, Virginia; Marcus, Scott & Reynolds, Dwight (Routledge, 2001) Volume 6, 935-947
- Djuric-Klajn, Stana. *A SURVEY OF SERBIAN MUSIC THROUGH THE AGES*. (Belgrade: the Association of Composers of Serbia, 1972)
- During, Jean. Spector, Johanna. At'ayan, Robert. “Kamanché” *The GROVE Dictionary of Musical Instruments*, Stanley Sadie (three volume; New York: Macmillan Press Limited, 1984) 2, 353
- Forry, Mark. “Serbia,” *Garland Encyclopedia of World Music*, Danielson, Virginia (Routledge, 2001) Volume 8 Europe~Serbia, 943-950
- Golemovic, O. Dimitrije. *Balkan Refrain - Form and Tradition in European Folk Song*, The Scarecrow Press, Inc., 2010
- Harvey, Jonathan. *Music and Inspiration*. [ed. by Michael Downes](London: Faber and faber. 1999)
- Hosokawa, Toshio “Melodia” for Free Bass Accordion, Germany: Hohner Verlag GmbH
- Keller, M. James. “Fibers, Yarn, and Wire.” Program notes for *CONTACT!*, December 16, 2011 (New York: New York Philharmonic, 2011) P.5

- Kettlewell, David. "Dulcimer," *The GROVE Dictionary of Musical Instruments*, Stanley Sadie (three volume; New York: Macmillan Press Limited, 1984) 1, 620-632
- Kettering, Karen. "Domesticating Uzbeks: Central Asians in Soviet decorative art of the twenties and thirties," *Colonialism and the Object empire, material culture and the museum*, [ed. by Tim Barringer and Tom Flynn] (London: Routledge, 1998) Part 8: 95-110
- Lang, David. "In the Composer's words." Program notes for *Making Music: David Lang*, January 27, 2012 (New York: Carnegie Hall, 2012) 24-27
- Levin, Theodore. "Central Asia: Overview," *Garland Encyclopedia of World Music*, Danielson, Virginia; Marcus, Scott & Reynolds, Dwight (Routledge, 2001) Volume 6, 895-906
- Levy, Claire. "Who is the "Other" in the Balkan? Local Ethnic Music as a Different Source of Identities in Bulgaria," *Music Popular Culture Identities*, [ed. by Richard Young][Critical Studies Vol.19 ed. by Myriam Diaz-Diocaretz] (New York: Rodopi, 2002) 215-229
- Lochhead, Judy. Program notes for *Making Music: Kaija Saariaho*, March 5, 2012 (New York: Carnegie Hall, 2012) 24-27
- Marija Masnikosa. "THE LIFE AND WORK OF LJUBICA MARIC – 'MULTIFARIOUSNESS OF ONE.'" Translated by Goran Kapetanovic. 2009  
New Sound 33 I/2009
- Milin, Melita. "Serbian Music of the Second Half of the 20<sup>th</sup> Century: From Socialist Realism to Postmodernism," *Serbian and Greek Art Music A Patch to Western Music History*, Katy Romanou (Bristol: Intellect, 2009) Chapter 5: 81-96
- Milojkovic-Djuric, Jelena. *TRADITION AND AVANT-GARDE: THE ARTS IN SERBIAN CULTURE BETWEEN THE TWO WORLD WARS*. Columbia University Press. 1984
- Neubauer, Eckhard. "Islamic religious music," *The GROVE Dictionary of Musical and Musicians*, Stanley Sadie (twenty volumes; London: Macmillan Press Limited, 1980) 9, 342
- Naficy, Hamid. "Identity Politics and Iranian Exile Music Video," *Music Popular Culture Identities*, [ed. by Richard Young] [Critical Studies Vol.19 ed. by Myriam Diaz-Diocaretz] (New York: Rodopi, 2002) 249-267
- Novak, David. *Playing Off Site: The Untranslation of Onkyo*, Austin, University of Texas Press. 2010
- Poche, Christian. "Qanun," *The GROVE Dictionary of Musical Instruments*, Stanley Sadie (three volume; New York: Macmillan Press Limited, 1984) 3, 169
- Poulakis, Nich. "Chrestou, Adames, Koukos: Greek Avant-garde Music During the Second Half of the 20<sup>th</sup> Century," *Serbian and Greek Art Music A Patch to Western Music History*, Katy Romanou(Bristol: Intellect, 2009) Chapter 9: 187-204
- Slobin, Mark. "The Tajiks." *The GROVE Dictionary of Musical and Musicians*, Stanley Sadie (twenty volumes; London: Macmillan Press Limited, 1980) 19, 418-420
- \_\_\_\_\_. "The Uzbeks." *The GROVE Dictionary of Musical and Musicians*, Stanley Sadie (twenty volumes; London: Macmillan Press Limited, 1980) 19, 422-424
- \_\_\_\_\_. ed. "Double clarinet," *The GROVE Dictionary of Musical Instruments*, Stanley Sadie (three volume; New York: Macmillan Press Limited, 1984) 1, 594
- \_\_\_\_\_. ed. "Maqam." *The GROVE Dictionary of Musical and Musicians*, Stanley Sadie (twenty volumes; London: Macmillan Press Limited, 1980) 11, 638
- Sultanova, Razia. "Music and Identity in Central Asia: Introduction." *Ethnomusicology Forum Vol. 14, No.2* (Routledge. 2005) 131-142
- Sultanova, Razia & Levin, Theodore. "The Classical Music of Uzbeks and Tajiks," *Garland Encyclopedia of World Music*, Danielson, Virginia; Marcus, Scott & Reynolds, Dwight (Routledge, 2001) Volume 6, 909-920
- Tomasevic, Katarina. "Musical Life in Serbia in the First Half of the 20<sup>th</sup> Century: Institutions and Repertoire," *Serbian and Greek Art Music A Patch to Western Music History*, Katy Romanou (Bristol: Intellect, 2009) Chapter 2: 33-54
- Vanderpoel, Peter. *POLYRHYTHMS AND ARCHITECTURE*. (thesis., Virginia, 2003)
- Woolfe, Zachary. "How About Some More New Stuff?" *New York Times*, January 6, 2012, NYTimes.com (2013. 1.15 アクセス)
- [公演パンフレット]  
福島とウズベキスタン交流 20 周年記念『バホール』とウズベキスタン (バホール: ウズベキスタン国立民族舞踊団)  
発行: 福島県ウズベキスタン文化経済交流協会 (1999)
- [CD ライナーノート]  
Torikai, Ushio [ 阿吽の音 ] Liner notes for A UN ( 日本伝統文化振興財団, VZCG-159, 2009) 2-4 頁  
Torikai, Ushio. [ 存亡の秋 ] Liner notes for SONBOU NO TOKI ( 日本伝統文化振興財団, VZCG-563, 2005) 2-3 頁
- [CD]  
Ljubica Maric. *THRESHOLD OF DREAM*. (CHANDOS, 2004)
- Ljubica Maric. *KAMERNA MUZIKA*. (Beograd; Terpsihora, 199- )
- [World Sun Project CD Booklet]  
Sirmais, Māris. "The Word, Courage, Selection, Freedom, Love, The Sun, and The Solar System," *World Sun Project, Kamer...*, 2008
- Viķe-Freiberga, Vaira. "Kamer... 2008 The sonorous Sun:

Sun songs of the earth," *World Sun Project*, Kamer..., 2008